



小説 響

水野 仙子

(一)
藤村の羊羹、岡野の栗饅頭、それから臺灣喫茶店の落花生など、あの人の心盡しの数々が、一つ一つ包みの中から取出されつゝあつた。私はゴム枕に片頬をつけたまゝ、黙つてお蔭が鉄刀をもつて糸を切るのから、その糸を丹念にくるくると指の先に巻いて、薄紫と赤と青との切手の貼られた送票を丁寧に剝がしたりしてゐるのを、もどかしく眺めて

ゐた。けれどもそのもどかしさに何ともいへぬ楽しさがあるのを思つて、私は急かすにぢいつと堪へてお蔭の手許をみつめてゐた。書簡箋、小形の封筒、そんなものを順々にお蔭が私の枕許に並べたてた。その時、それらのものの間に隠れるやうに挟まつてゐた、オレンジ色の表紙を持つたこの小さな手帖を、私はふと手をのべて自分の蒲團の上に取つたのであつた。片手の指先でバラ／＼と繰ると、彈力のある紙は大急ぎで優しい薄桃色の線を綾に亂して伏

せて行つた。私は何となくこの手帖が氣に入つてしまつた。そして直ぐに萬年筆の鞘をぬいて、そのオレンジ色のおもてに『響』と題を打つたのであつた。けれどもそれは、別にどうといふ意味を持たせた積りではなかつた。たゞその時、左を下にして横はつてゐた私の心臓の音が、とツとツとツと静かに枕に響いてゐたのを、ふとそのまゝ紙の表に印象させたまでの事であつた。

けれども、私は別にこれぞといつてこゝに書かなければならぬ事を持つてゐるのではない。毎日々々、或は瞬間に、或は可なり長い間連續して、さまざまの思ひは私の心を過ぎてゆく。それらが或は歌といはれるものゝ形ちを取る事もあれば、詩ともいふべきリズムを持つた獨り言である場合もある。けれども敢てそれらを書きとめて置いて私の何になるだらう？ やがては消えてゆくべき命であり、姿であるものを……私の心臓の響がはたと絶えた時、最もよ

くそのすべての意味を語るものは、何も書かずに残されたこの白紙であるであらうよ！ すべてを書き残すにしては、餘りにこの思ひが多過ぎる……さらば愛も憎みも惱みも苦しみもよ、今暫くが間であらうほどに、私の胸が張り裂けるまでは、お前達の棲家として私はこの心臓を提供する。それらのものが、私のものとしてこの世にある間のしは日毎夜毎に枕を傳うて我と我が耳に入る、あゝこの響である……とツとツとツ……

(かう、序のやうなものが、その手帖のはじめに書かれてあつた。それは昨年の秋の頃、廿七で死んで行つた或る人妻の、たつた一つの遺稿……ともいふべきものであつた。彼女は生前相當な文筆を持つてゐたのであつたのに、自分の病が到底起つ事が出来ないのを知つてからは、時たま極めて僅かな人達の間を書く手紙以外には、決してものを書かなかつ

た。それは書く事がなかつたのでも、又書きたくな
いからでもなかつたのだと私は……（作者）思つてゐ
る。それは書きたくて書きたくて仕方になかつたか
らこそ、その願ひが餘りに強く餘りに大きかつたか
らこそ、彼女は書かなかつたのだと私は思つてゐ
る。書き残すほどのものならば、書いて／＼書きぬ
きたい、けれどもそれにしては、彼女の息はそれに
伴ひ續かなかつた。その爲めに、最初のうちは彼女
は頻りに悶え苦しんだ。けれども、それは苦しみめば
苦しむほど、却つて悩みばかりがあり／＼と残され
てゆくのを悟つてからは、ふつつりと思ひ諦めたや
うに、彼女は絶えてものを書き綴るといふ事がな
つた。さうしてその折々に浮んで来るさま／＼な思
ひを、その折々の去來にまかして、語る人もない故
郷の寂しい田舎で、堅く口を結んで一年餘り年月を
送つたのであつた。この『響』はその間に書かれた
ものらしく、日記や其他の書き反古は生前にすべて

焼かせてしまつたとかで、これだけがやつと其枕許
から發見されたのであつた。それは大方みな白紙で
あつた。それは彼女の日記でもあれば、又感想録で
もあるところの、意味の深い白紙であつた。私がそ
の夫なる人と共にこの手帖をひらいて見た時、めく
つても／＼出て来る白紙は、却てあの終りに近い頃
の沈黙と微笑とを、それからそれを獲るまでの長い
長い間の苦悶と葛藤とを、最もよく雄辯に語つてゐ
るとしか思はれなかつた。たゞこの手帖のお終ひの
方に、恰も何かの例外のやうに、次に録するやうな
ものが全文書き込まれてあつた。それは彼女の従姉
へと書かれたものであつた。それを見ると、現代の
相當な教育を受けた或る年輩の女の、妻の、さうし
て死といふものを凝視めてゐる人の、或る心持ちが
しみ／＼わかるやうに思へるのである……。

(一一)

桃谷研究試験所創製

水原大造

光榮 ある 御化粧料
三 十 六 種 の 内

皆様御愛用の

Ⅱ 白色美顔水はⅡ

手間が要らずに、氣品のある、ほん
とうに氣持よく美しい、皆様お望
み通りの清新なお化粧ができる
言ふので、益々愛用の方が殖え、
薄化粧料として今彌々非常な勢力
で御座います。白色美顔水のお化
粧は確に氣品に於て優れて居ます

御内意により創製したる品

製創所験試究研谷桃

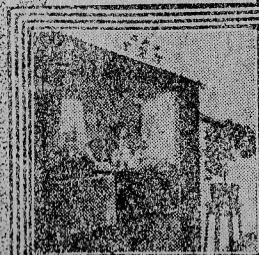
ムーリク顔美



皆様の
素と美顔洗粉と共に或る尊貴の御係から御
内意を蒙つて創製致した品であります。色
の白い事と、質の軽い事とはこの新しいクリームの一つ
の特色、舶來品にも優ると言はれる點であります。それ
に普通のクリームには多少ネバリ氣があるものですが、
原料から違つてゐる美顔クリームには殆どネバリ氣が無
く、さら／＼として附けた後の氣持のよいこと、ホンに
理想のクリームとはこんなものかと思ひになります。
それに配合の妙を極めた芳香は、百花の園に遊ぶが如き
思あらしめます。ですから從來クリームをお用ひになつ
てゐるお方であれば、一度お使いひになつても、成程これ
は良いクリームであると、ハツキリお分りになります。

光榮ある御
化粧料…三
十六種の内

美顔白粉始め高貴御
用品品三十六種を謹
製しつゝある謹製至
（桃谷研究試験所内）



ふるさとに雪埋れて病む吾を愛でゝさびしくかへ
りゆきし君はも。

寂しさはいつもあの人の後姿に残る。そのマン
トの肩といはず裾といはずに、雪は亂れ／＼てあと
を追うたであらう、見送る事も叶はなくて、いつば
いに開いた瞳を硝子戸の外に置いてゐると、雪は狂
ふやうに降りしきつてゐたつけ、その日は早くも先
へ先へと流れ行つてしまつた。

今夜は、いつもあの人が見えて歸つた後暫くの、
寂しい落着きの氣持ちのうちにゐる。病氣以來の並
並ならぬ効はりを思ふにつけ、我儘ばかりしてゐた
昔の苦しい記憶をのみ残して、何の酬ゆるところも
なく離れて行かなければならぬのが濟まなく、侘び
しい。けれども考へても／＼、すべては考へ切れな
い、それは考へ盡したも同じ事なのだ。にも係らず
その癖私はやつぱりいろんな事を考へてゐる。それ
はやがて来る嚴かなるものゝ前に、如何に造作なく

崩れ去るものであらうとも、いろ／＼な色に塗ら
た積木を、弄ぶとは知らずに幼い建築を企てる子供
のやうに、私はやつぱりとかくこの胸に不思議な様
な樓閣を築いたりしてゐる。寂しければ寂しい様
に、悲しければ悲しい姿に…。
この頃ふとある考が私の心を捉へて離さない。そ
れも不思議な樓閣に棲むやうなもの、一つであるか
も知れないけれど、ともかく私の心はその考へに促
がされて止まない故に私は靜かに百合さんにそれを
書いて置かうと思ふ。

百合さん。

この手紙が他日私の亡いと貴女のお目に觸れる
事があつても、どうか死者に對した時にあり勝のあ
らたまつた心持ちや、何となく感じるものである義
務の念やに支配されずに、どうか自然な心持ちで、
まだ生きて丈夫である私のたよりの一つだと思つて

讀んで下さい。それでないとして、私があなたにお話しようとする心持ちが、その自然さを失つて、この手紙の命を失つてしまふ事になりますから。

そして百合さん、假令この手紙が書置き形式をなすとしても、敢て告別の言葉をこゝにくだしく書き残しますまいね、それはたゞ後に残つた人の情緒をそゝつて、徒らな悲しみを湧きたゞせるに過ぎませんから。お別れなら多分もつとそれの適當した場合にする事が出来ませう、多分恐らくもう一度は、あなたにもお目にかゝれる事が出来ると思ひますから。よしや又私の終りが意外に早く突然に來て、あなたにも誰にもお目にかゝられなかつたとしても、私の冷たくなつた唇は、其時却て最も確かに左様ならを語るでせう、何故ならば、それが一番最後のほんとの左様ならですから。私はあの二度目の略血以來といふもの、毎日世と人に向つて一つづつ左様ならを繰り返して來ました。今も毎日心から

眞面目にそれを繰り返してゐます。

私の用意はもう既に成つてゐます。どうしてもかうしも避けられない爲めに、せめては慌てないまでに整へなければならぬその用意が。けれどもあの捕捉すべからざるもの——それは死の姿——が、最早や、私を苦しめはしないけれども、絶えず私の身邊に漂つて、一生懸命にその姿をはつきり掴まうと凝視めてゐる私を惱まし疲らせてゐます。私の眼はもう地には向いてゐません、たゞひたすらにあの、覗かうとすれば隠れ、掴まうとすれば消えて行く姿に向つていつばいに目を見ひらいてゐます。もう其處より外に私の目の向けどころはないのです。そして一步一步それに向つて近づいて行くに従つて、不思議にも心の苦痛や悩みは一步一步後戻りをしてゆきます。依然として私を招く姿は暗く臆ろではあるけれども、私の心は決してそれを厭ふところか、或る懷しみをすら持つて迎へ、又手をのべてゐます。



美しき幻影を冷たい現實の墓場に葬る事の悲しさに泣いた心は、もう古い脱殻のやうに、私の心の片隅に押寄せられてひたすらに眞實を見ようとする願ひに胸を抱いてゐます、極めて柔順に、極めて謙遜に。そしてその眞實は、今の私に取つてはどうしても、間もなく私の爲めに來る死と結び合つて離す事が出來なくなつてゐます。それ故今私がどんなに澤山の涙を流してゐようとも、最早やその涙は私の悲しみや苦しみを表はすものでなくなつてゐます。それは名づける事の出來ぬ、自然な、たゞ靜かに流れる涙です。

けれども百合さん、かうしても自分自身のために泣く必要のなくなつた私も、残されたものの悲哀を思ふ時には、まだ／＼やつぱりこの二つの眼に堪へ切れぬ熱い涙がこぼれます。それは月日と共に薄れゆき、いつかは忘れ去られるものではあつても、死んで行くといふ事が私一人の出來事にとゞまらず

に、多少に保らず、或は一時にもせよ、或る打撃を人の上に残して行かなければならないといふ事は、私に取つてはほんとに辛く苦しい事です。

(三)

死別の哀苦は、逝くものよりも、感じやすい心と共に残るものゝ方がどんなにか強く生々しいことでせう、あなたはよう／＼それを知つてらつしやるのですね。私は覺えてゐます、あの時のあなたのあの激しい嗚咽を……。それはもう、まだつい此間のやうだけれども三年にもなりますね。弘一さんの靜かな骸を納めた寢棺で、焼場へと行くためにあの鎌倉の家の門を出たのは、氣の短い冬の日が、一秒の猶豫もなしにさつさと暮れて行つた頃で、世話人の振替す提灯の灯影で、漸く人々の顔がそれと分るやうな時でした。ざし／＼と重々しい、けれども寂しい音をたて、白木の棺は私の車の脇をすれ／＼に通

つて先の方へ行きました。幾臺もの車が置かれた順序なりにそれに續かうとすると、「どうぞ御縁の近い方からお先に願ひます、御縁の近い方は前の方にいらして下さい。」と葬儀屋の男が呼んでゐるので、車は暫く車上の人の指圖のまゝに入り亂れました。亡き人の妻の従妹としての私は、血筋をひいたと思はれる人々の後に遠慮深く車を入れさせて、靜々と動いて行く行列に續きました。振返つても見なかつたけれど、氣配ひではもう二臺ばかりが私のあとに續いてるやうでした。私はあなたがどのへんにいらしたのか——恐らく棺のすぐあとに従つたのでしたでせうけれど——少しも知りませんでした。私はなるべく／＼あなたと顔を眞面目にむき合せるのを避けてゐました。あなたの眼を見る事が私には辛かつたのです。あなたの眼は私の涙を誘ひ、私の涙はあなたが一生懸命に支へてゐる涙の堰を危くするだらうと恐れたのでした。私は人知れず多勢の中から、

絶えずあなたの姿を求め又追うてゐました。あの可なり複雑した親戚關係の人達に圍繞されて、あなたは實に雄々しく、僅かな事にも氣を配つて亡き人の遺志のために戦ひながら立派に振舞つてゐました。その取亂さない姿が私には一層悲しく可哀いさうに見えました。私は初めから終ひまで車の上で泣き通しでして。何故こんなに泣くのだらうと自分で自分を怪しむ程、泣けて／＼仕方がありませんでした。それはあなたに對する同情と同感とが、人事ならすひし／＼と感じられたからで、私に取つて半分はもう自分の打撃であり悲しさであつたのでした。やがては自分にもかうした境遇がめぐつて來るのだといふ考へが、どうしてもこびりついたやうに頭から離れないで——今から考へると可笑しいやうだけれど、あの頃はAが悪るかつた時分でせう、そして私は元氣でびん／＼してたのですから、私はすつかり自分が残されるものだと思ひ込んでゐたので

した——もう既に其時が來たのでもあるかのやうに、あなたの哀痛と私のそれとが一緒になつて、又その癖百合さんが可哀いさうだ——と始終胸の中で呟きながら、闇の夜の車の上で誰にも顔を見られないのを幸ひ、ひた流しに涙を流しながら運ばれてゆきました。一生のうちで……ともう言つても差支へないでせう、あんなに泣いたのは、お父さんお母さんの失くなつた時とあの時とだけで、あの時はお父さんお母さんの時よりも、もつと——泣いた位に私は記憶してゐます、それはそれだけ私達が大人になつて、いろいろな憂き苦しみを實際に知つて來たからなのでせう。

かうしてあの暗い野道を、車夫達は掛聲から掛聲を送りながら、あの暗い險しい寂しい火葬場のある山の下に着きました。私達は其處からみな徒歩になつて、臙ろな弓張提灯の導くのを頼りに、足許に氣を奪られながら、揉まれ——てのぼつて行く棺のあ

とに續きました。あ、何といふはつきりとした記憶でせう、あの寂しい恐ろしい夜の光景は——。

太々しい怖い顔の隠坊から火室の鍵を受取つて、それでもあなたは猶念に念を入れて改めるやうに、その實は離れ難なく、弓張提灯を振舞して、あの氣味のわるい火室のぐるりを一週しました。現在その手で口火をつけて、現在その手で夫の亡骸を焼くその焰の音が、煉瓦に圍まれた不思議な世界の中に、耳を聳てるまでもなくはつきりと聞えてゐました。生と死との歴然とした區別が、煉瓦一重の中と外とにありました。死の方は暖かく、生の方は冷たく暗かつたのです。鐵の扉は固く閉ざれて、中の灯影が糸よりも細くちらちらと洩れてゐました——何と思つたかあなたはびたりと扉の前に立ちどまつて、既に下された錠に手を掛けてそれをゆすりました——『大丈夫ですよ奥様、鍵はこの通りこちらで預りましたんですから、明日お骨上げにおいでになるまで

は誰だつて開ける事が出来ません、それにこの人が一晩寝ないで番をするんですから……』と、こゝまでも蹤いて來た葬儀屋の男が、時に心付けといふ意味をふくめて言つた時、あなたがどんな氣がなすつたか私はよく知つてゐます。それなのに人々はお先刻から外に出てあなたを待つてゐました。さあと促がされて、一步片足があの火屋の關の外に出た時『わッ！』といつてあなたは突然體を二つに折つてしまひました。とうとう悲みの極みで堤が切れてしまつたのでしたね。その刹那あなたの程近にゐた私は、いきなり自分も共にわつとなつてあなたを抱きしめたいと思ひました。けれども私はやつぱりそれを堪へました。あなたをして其處で思ふさま泣かせる事の出来ないのを口惜しく可哀いさうに思ひながら、私はたゞ黙つて冷たく瀧のやうに流れるものを拭ひもあへずに、あなたの袂の先を掴んで、思ふさまそれを握りしめました。その袂を強く引く事す

らも敢てしなかつた私を、ハンカチでびつたりと顔を押へてゐたあなたは恐らく今まで御存じがなかつたでせう、あなたが顔をあげた時には、みんなが吃驚してこちらを振り向いてゐましたので、佐瀬家の親戚としては全く存在を認められない位の私が、こんなにも泣いてゐるといふ事を恥かしく隠すやうな氣持ちで下を向いてゐましたから。その時は私の持つて出たハンケチと鼻紙とは殆どもう用をなさなくなつてゐました。それで私は暗いところに行くと、頻りに顔を手で拂ひ指で拭ひしてゐました。

(四)

あなたに取つてこれはよしない事を言ひ出したのかも知れませんが、けれども、何も彼も私に取つてはお名残りであるといふ事によつてどうか許して下さい。毎日かうして少しづつ、なげなしの精力を盡して書きつづけますのも、残して行く人のために

あなたに取つてこれはよしない事を言ひ出したのかも知れませんが、けれども、何も彼も私に取つてはお名残りであるといふ事によつてどうか許して下さい。毎日かうして少しづつ、なげなしの精力を盡して書きつづけますのも、残して行く人のために

残る思ひがそれをさせるのです。愚にも夫に先だ、
れるものとはかり思つてゐた私が、二年とたゝぬ間
に思ひもしなかつたこんな病氣に罹つて、今は其命
も消えゆく燈火の静かなゆらぎをしてゐるとは、
今更に寂しい微笑がこの色褪せた唇にのびります。
可哀いさうなものは人間ですね、何にも知らない
で、ほんとに何にも知らないであくせくと……けれ
ども、今はそれでいいのだといふ事がやうやくわか
りかけました。自分の運命を知るやうになつてから
はもうお終ひです、それを確實に知るやうになつて
は。今の私ですらも、まだ……どうかすると萬一を
思ふ心があればこそ、かうして人間のお仲間入りを
まだしてゐる譯なのでせうが、死ぬ事を知るのでは
なくて、死そのものを——それこそあの捕提すべか
らざるものを——しかと知り得る時には、人はもう
その死に融和し、合體し、いや／＼既に『死』その
ものとなつてゐます。『死す』といふ事は何といふ簡

明な、それで、動かす事の出来ない、換りを用ゐる
事の出来ない力でせう、間一髪を入れない、迅速な、
明確な、嚴かな、極めて弱くて極めて強い力ではあ
りませんか……『死す。』

死といふ事を無暗に問題にすると思はないで下さ
い、それを考へないではゐられないのだと思つて下
さい、自分のためにも亦あの人のためにも。私自身
についてはもうどうやら解決がついたと思つてゐま
す、それが間違つてゐるか間違つてゐないかは別問
題として。たゞ私の無いあの人のために私は
今さま／＼に思ひ圖つてゐます。恐らくこれは餘計
な事でせう、來年の事を言つてすら鬼が笑ふと言ふ
のに、増して死にゆく者が、生き残る人の生活に干
渉するなんて、ほんとに要らざるおせつかいです。
ですけれども、さう思ひながらやつぱりいろんな事
を考へます、自分でもそれが空想で、決して事實は
そんな風になつてゆくものではないといふ事を百も

承知しながら。ではそれは私の遊戲なのでせうか、
いえ／＼決してさうではありません。たゞ私は、せ
めてはあの人の上に斯くあつて欲しいと思ふ事を思
ふばかりなのです。それを願ひはするけれども、神
様にだつて運命にだつてそれを請求しようとはさら
さら思ひません、瞑するものはたゞ目をつぶりさへ
すればそれでいいではないか、その黙從の外に私の
爲すべきことはない筈と、頭ではよく心得てゐます
もの。

けれども百合さん、其時が来るまでは、やつぱり
哀れな人間の本性として、とやかくだらぬ思ひや
りや思ひ過しをするものと見えます。氣にしない
といひながら氣になるのですね、何だかあの人の姿
が寂しさうです。春になつたらどうしよう、夏が來
たらどうするだらう、秋が來たら冬になつたら
と、些細な日常生活の事まで、自分がない後の事を
氣にする私を笑はないで下さい。親が無くて子は

育つといふ譬がある位ですのに、殊に大の男一人を
何と心得てゐるのだと人は笑ふかも知れません、け
れども百合さん、どうかあなただけはそれを笑はな
いで下さいな。

つく／＼省れば、私はあの人の手に取つて決してよ
い妻ではありませんでした。それにも係らずあの人
は當分寂しくなるでせう、幸か不幸か私達の間は一
人の子供すらもなかつたので、あの人は全くのひと
りぼつちとなります。自分が愛された事を信じて安
らかに眠つてゆく事の出来る私は、死ぬといふ事が
自分一人易きにつくやうで、何だかそれが心苦しく
て仕方がありません。せめては私の亡い方が、あの
人の生活に取つて藝術に取つて幸福であつてくれる
やうに！ さうでなかつたら、ではどうかよりよき
者があの人のために與へられるやうに！ 私は少し
も無理な心持ちなしにそれを願つてゐます。そして
若しも死後生活に於てこの世の消息を知り得る事が

出来たならば、あの人がどんなに他の女を愛しようとも、それがあの人を慰め、又幸福にするのならば、私は喜んでその二人のために祈るでせう。

争ひも、嫉妬も、憎しみも、さうした陰なる醜い感情は、命に先立つてだん／＼私の肉體を離れつゝあります。すべてが私を見離して行く……たゞどうかこの愛だけは、最後まで、願はくばその骸にまでも踏みとどまつてくれ！

寂しい世ではありました。私に取つてそれは廿六年間、楽しい事も嬉しい事もすべてつきくるめて人世は寂しかつたと思ひます。私達は又食しかつた。けれども燃えて盡きる事のない愛の焰でお互が温め合ひました。或時は湿り、或時は突風の危機に過つて、僅かに消え残つた事もありますけれど、そしてそれを私達は最初極僅かしか持つてゐませんでしたけれど、いろいろな艱難や寂しい目に遇ふ度びに、だん／＼だん／＼焰は強められて行きました。お互

に援けあひ暖めあひないで、どうしてこの惱みの多い世に満足して生きる事が出来ませう、それなのに今あの人はその伴侶を失はうとしてゐます。

(五)

あなたの籍もとう／＼叔山にかへりましたのですつてね、勿論弘一さんを失つてからの佐瀬家に、あなたの執着はない筈ですけど、夫の性を捨てる事の苦しさ寂さはどんなであつたらうかとお察ししてゐます。あの家は決して操正しい寡婦のとゞまるに適當した家ではなかつたけれど、體は實家に寄せながらも、いつまでも佐瀬の姓をあなたは名乗る積りでゐられたのにね、あなたの行末を思ふ伯母さんや從兄さんの深慮は、既にあの不幸當時からその事を考へてゐられたのでせう、いづぞや伯母さんが弘一さんのお墓の前でかう仰言いました。『彼女がね、この石碑をたてる時に、どうしても自分の名前も一緒に



刻むのだと言ひ張つて聞かなかつたんですよ。ですけれども純太郎がそれは斷じていけないってね、許しませんでしたけどもね……。伯母さんも目にいっぱい涙を溜めてゐましたつけ。

思ひのまゝにならぬのが世の中だとは言ひながら、よしない再縁のすゝめに困り果て、獨立の道を密かに探してゐるといつかのあなたのお手紙にありましたが、ほんとにあなたの運命もどうなるのでせう、まだ達者で元氣なお母さんと、立派な兄さんとを持ちながら、あなたもやつぱり寂しい人の一人ですわねえ。到底自分には忘れる事の出来ぬ亡き人の思ひを抱いて、再び人に嫁がうとは思はないと仰言つてゐるあなたの心を私は嬉しく思つてゐます、けれどもそれは何といふ悲しく寂しい生涯でせう、あなたがその境涯に堪へ得るかどうかなどといふ事は決して問題にしないでも、私はあなたの再婚に就いて考へてみたいやうな氣がしてゐます。

若しもねえ百合さん、あなたが大事に胸に抱いてゐるその思ひに、少しも手を加へる事をしないで、そしてその爲めにあなたの良心が責めらるゝ事なしに出来る結婚があるとしたら、それに就いてはどうお思ひになりますか。勿論さうした場合は、やはり同じやうな心の状態にある人との間に於いてのみ可能な事です……明敏なあなたは、もう既に私が何を言ひたいと思つてゐるのかお察しになつたでせうね、どうか悪く思はないで下さいな、そして願はくば死者の口に耳を寄せてものを聞かうとするやうな注意をもつて、この事を考へて下さいませんか、初めからそれが無理な事だとはわかつてゐても、無理は無理かも知れませんが、併しそれは理不盡な事でも、亦決して不自然な事でもないだらうと私には思はれるのです。運命の仕事には決して不自然といふ事はありません、假令不自然に見える事があつたとしても、よく――辿つてみれば、その不自然

然らしく見えるのが却て最も自然な状態である場合がよくあります。

私は今運命といふ言葉を使ひました、さうした考へが恰も暗示のやうに私の脳裡を過ぎて行つたものですから……。けれどもこれを具體的な話にして見た時に、何といふそれは突飛な思ひ付きでせう、若しも伯母さんがこんな事をお聞きになつたら、呆れてお了ひになるどころか、必と『人を馬鹿にしてる！』とお腹立ちになるかも知れませんね、伯母さんは私達の貧乏を憐れんで下さつたけれど、私達を祝福し又あの人を認めては下さいませんでした。あの人は全く社會的には地位もない財産もない、たゞ一介の貧乏な繪かきに過ぎません。そして空しき名聲は勿論の事、又その藝術に大天才の閃きを持つてゐる譯でもありません。けれどもあの性格の中に持つてゐる純真なものが、やがてはその藝術を清め、小さければ小さいだけの眞實を其處から見出し得る事

だらうと私は思つて居ます。そして人間としての生活に誰に憚るところもなく、又耻づる事もなく、静かに寂しく生きて行く人です。體の方も私とは反對にだん／＼だん／＼丈夫になつて行くやうです。私はそれを何より嬉しく、涙ぐましく見まもつてゐます。

けれどもかうした人が、あなたの行末を相當な富と地位とで固めようと心配してゐられる伯母さんや従兄さんに取つて、一顧の値もない事をよく承知してゐながら、そしてそれをちつとも無地だとは思はないで、猶且つこんな考へをあなたに打明けるといふのは、私もよほど夢想家ですことね、たゞ小さい時から仲よしで、同い年のせいかよく氣があつて、大てい何事にも私に同意し又理解してくれたあなたを信じ、百合さんあなたからこそ安心してこんな取りとめもない事を書き置いて行くのですよ。私はあなたを自分の半身のやうに心得て、しかも私

の短所を補ふものをあなたがふんだんに持つてるだけに、そのよりよき半身に私はあの人を托して行きたいと、勝手な事を空想したのです。

若しもこの事があなたを侮辱する事に當つたらどうぞ勘忍して頂戴。私は決してこの事をあなたに強ひるのでもお願ひするのでもありません、たゞ若しもどうかした運命でそんな事にもなつたらばと、私の夢をお話してゐるところなのです。どうか責任をもつてこの手紙を讀まないで下さい、そしてあなたの自由意志をもつて、あなたのこの後の幸福に就いて敏感であつて下さい。

誰でもこの世に心強く生きるためには一つの慰めが必要な筈です、それは人によつてその求めるものが違ふ通りにその慰めも違ふでせうけれど、貧富を超越してお互に宥し合ひ援け合ふ愛の慰めこそは、一番搖ぎのない力だらうと私は信じてゐます。そして夫妻の結合が、お互に最初であり最後であられる

人は何よりも幸福です、けれども大抵は皆その胸に一度半度の愛の負傷を受けてゐます、この事はどう思つても寂しい事ではありませんか、悲しきは誰しも遂にその運命に支配さるゝ人間であるよ！せめてはお互に何事をも容しあひ、慰めあうて、更に其處から生れて来る愛の泉でその傷を洗はなくては！

(六)

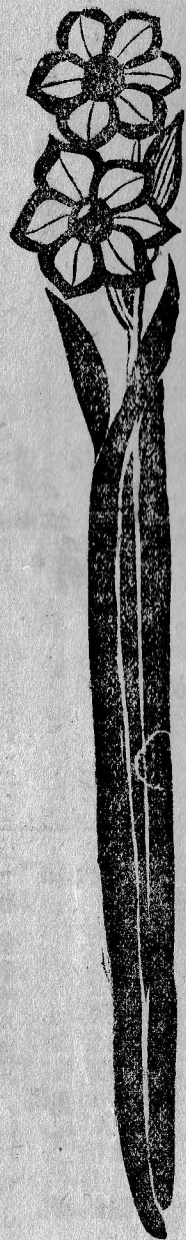
私の大好きな愛する従姉の百合さん、もう左様なにしませうね、どうか幸福で送つて下さいな、私が死んでもあんまり力を落さないで頂戴。あなたの純な心持ちをいつまでも失はないやうに祈ります。この手紙を見てしまつたら焼いて下さいね、あなたに打明けた私の心持ちは、あなたの自由を縛らないやうに、私自身片づばしから忘れて行く事にしませう、大きな／＼忘却が来るその前に。

すべては導くものゝ掌にあるのだけれど、若しも

あなたを眞に幸福にする縁があつたなら、皆様の安心のために再縁なすつた方がよくはないかと思ひます。今更情ない事をいふとお思ひかも知れないけれど、獨身で過さうといふ事があなたに取つて自然な安易な心持ちであるならば、寂しいといふ事を不幸のうちだとは思つてゐない私は、その心持ちを踏み躪つてもとおすゝめはしないけれど、若しも死者に對する感情とか義理とかいふものがそれを阻むのだつたら、それは無益な事だといひたく思ひます。

若しもあなたが死者から嘗て愛されてゐた事を信ずるならば、安心して幸福へと導く手に腕をまかせてよいと思ひます。死んでゆく者は、たゞ／＼我が愛する者のより多く幸福である事より外は思ひ残さないですから……

書けば書くほど名残りが惜しくなつて來ます、胸がいっぱいになつて來ます……それでは左様なら！



談話室

◎私共は今年新年度の編輯を終つて、ホツと一息ついた處であります。丁度師走半ば過ぎのあの何とも云へぬ慌しい気分から一夜明けのんびりした初春の気分を、今私共は味つてゐるのであります。

◎五年振りに世界は平和に立ち復りました。今後の社會には戦後の影響を受けている問題が起ることと思ひます。之れに對して本誌の愛讀者の方々にもいろいろと御考へあらん事を御願申して置きます。

◎新年號は御覽の通りの姿で皆様の御目にかかります。本誌も皆様の御聲援によつて十九の春を迎へる事が出来ました、今後とも末長く御愛讀を願ひます。

◎改稿に際して皆様に新年の御挨拶を申し上げます。皆様の健康にして益々祝福の豊かならん事を御祈りいたします。(十二月六日、千秋)

◎お正月には二十何日ある今からお芽出たと申すのも少々變な氣が致しますが、雑誌の編輯者は一月も二月も先きの仕事をせねばならぬので致し方がございせん。改まつた禮装をせすとも、歳晚のゴタゴタした忙しの中に居つても、本當の誠意をもつて大正八年の皆様の御多幸をお祈り致します。

◎大正七年のお正月には、私は可成り澤山の期待を持つて年を迎へましたが、どれもこれも片つ端から見事に外れて終ひました。しかしそれにも懲りず「來年は一つ」と云ふ心がまた起つて居ります。恐らくこれも九分九厘まで外れて終ふ事は間違ひがなさうですけれども、私は矢張り昨年と同じやうな意氣込みで居ります。人間はこんな風に實現の出來ぬ欲望に動かされて働き、豫定の期限に最初抱いた欲望の百分の一にも當らぬ收穫を得つゝ、徐々に進んで行くのではないでせうか。皆様に今年はいい欲望をうんと持つてなるべく早く、徐々に進まれるやう祈ります。(藤瀨)

女學世界 毎月一回發行

改正定價 東京二四〇番 一冊金貳拾八錢

大正七年十二月十七日印刷 本第拾九卷 大正八年一月一日發行 行第壹號

發行所 東京市日本橋區 博文館 印刷所 市川七作

御注文の代金は總て前金にて申受けま 御送金の際はなるべく振替貯金によら 東京二四〇番で御座います 郵切手代用は必ず一割増に願ひます 御注文の際は雑誌名及號數の御指定な 轉居の際は御購讀の雑誌名及新舊兩方 本館圖書目錄御望の方は御申込次第進 呈いたします



白色美容外療法

大擴張と移轉

アルラフワサーにて晒白アルラフワサーを塗り其上にアルラフワサーを塗り最も迅速に自美化す。ニキビツバカス、吹出物、ハダケ、ナマズ、注意服薬は体内の毒素悪血を去るも既に外面に現はれし前記の害毒に向つては効果はないものである。

白色原料アルラフワサー 一圓、二圓、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。

アルラフワサー 一週分 一圓、五十錢、服薬はニキビツバカス、吹出物、色黒、赤癩、油類、赤鼻、油肥、血

白色原料アルラフワサー 一圓、二圓、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。

アルラフワサー 一圓、五十錢、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。

アルラフワサー 一圓、五十錢、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。

アルラフワサー 一圓、五十錢、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。

アルラフワサー 一圓、五十錢、晒白粉の原因害物は消去アルラフワサー併用すれば効力偉大なり。